

6. 神々の出会い(ネグリトスとイグネイネス)  
時間のはじめ、まだ人類は創造されず、キャプタンという名前の、力の強い神様が地球に住んでいて、風に、地を吹き渡るように命じました。

キャプタンは大変激しく、怒りっぽい性格で、気分が突如変化するようなところがありました。調子のいい時は、とてもいいのですが、悪い時は、とても悪いのです。

彼の気分がいい時、キャプタンは小さな息をして、彼の口と鼻からは空気をゆっくり吹かせました。彼の暖かな息は、そよ風となって、地を吹き渡り、バラやユリやジャスミンとすべての花と薬草を踊らせたり、揺らしたりして、それらの甘い香りを空中に放っていました。このそよ風は、畑の中の緑の草をしならせ、曲げたりして、牧草地に美しい渦巻きやさざなみの模様を描いていました。暖かな息は、木々を優雅にしならせ、木に停まっている鳥たちの羽毛をくすぐり、それらの甘い歌で空気を満たし、そよ風がその歌を陽気に木から木へ運んでいました。

しかし、キャプタンの気分が悪くなると、彼の目は怒りで赤く輝き、彼の鼻は炎で揺らめきました。彼は深い深い呼吸をし、彼の肺を破裂するほど空気で一杯にしました。すると彼は、口と鼻からできるだけ激しく早く空気を吹かせました。彼は長く、低い叫び声をあげて、彼の冷たい息は大変な力を持って地上を吹き渡り、それによって木々や植物は地上から根こそぎ、もぎ取られるのでした。この破壊的な風は、大変凶暴で、その通り道では、どんなものでも、全てを破壊しました。

この頃、マグワエンという名前の美しい女神もいました。彼女は風に向かって海を吹き渡るように命じました。彼女には最高の魅惑的な女性らしい美しさと優雅さが備わっていて、常に彼女の官能的な体を、彼女が海で集めたこの上ないほどの白く輝く真珠で覆っていました。彼女はなめらかな褐色の肌と、魅了されるような深い黒色の目をして、彼女のしなやかな体から光沢のある黒い髪がずっと垂れて、上品な足首に口づけしていました。彼女は燃え立つような靈感を海のすべての生き物に与え、それらは彼女を全く崇めていました。

毎朝早く、美しいマグワエンは、海の深いところにある宮殿から、海面に上がってきて、揺らぐ水の上を優雅に歩いていました。広い海のどこでも彼女が行くところでは、イルカの群れがおともをし、彼女の周りで、水しぶきを上げて、飛び出し

たり、水にもぐったりして、彼らのびっくりするような曲芸で、彼女を楽しませていました。

そのようなある朝、美しいマグワエンと彼女の忠実なイルカたちは、海の表面一帯に、不思議なものを感じていました。彼女は異常な、ひきつけるような匂いを感じていました。それは近くの陸から水の上を漂っているのです。

この異常な香りに興味を持ち、マグワエンは彼女の領域である海を出て、陸に足を踏み入れ、近くの岩の方に歩きました。そこが異常な香りの源だったからです。彼女のイルカは海の水際に留まりましたが、彼らの女神に、注意するように声を出しました。特に、陸は彼女にとって不案内な所だったからです。

マグワエンがついに岩にたどり着いた時、彼女はすてきな、たくましい神がそこに座って、彼女が優雅に近づいてくるのを見つめていたのを見て、驚きました。

「おはようございます、お嬢様。」微笑むキャプタンは、明らかにマグワエンの立っている美しさに魅了されていました。

しかし、マグワエンは男の神をそれまでに見たことがなかったので、神経質になっていました。彼女はすぐに背を向けて、急いで安全な海に急ぎました。しかし、敏速なキャプタンは、すぐに女神の前に立ち、彼女が2歩も歩く前にその道を塞いだのです。このことも、マグワエンを狼狽させました。

「お嬢さん、私はあなたを怖がらそうとしているのではありません。」とキャプタンは言いました。「どうぞ、留まって、歩きませんか。」

しかし、マグワエンは男の友達が今までいなかったもので、このような会話はしたことがありませんでした。彼女はすぐに身構えました。「あなたは私が誰だか知らないの？」彼女は自信にあふれたキャプタンに問いました。「私は女神マグワエン。海を吹き渡る風をすべて支配しているのよ。私の命令で、力と憤激を持った波を、あなたの地の山のように高くすることもできるのよ。」

キャプタンはマグワエンの強がりに微笑み、彼女の周りを歩き、彼女をジロジロ見ました。「私にも特別な力がある。」と彼は言いました。美しい女神に深く印象付けようと思って、キャプタンは彼の指を鳴らしました。するとすぐに黒い雲が彼らの上に現れ、太陽を覆い隠しました。キャプタ

## フィリピンの神話と伝説

ンはまた指を鳴らしました。黒い雲は弾けるような雷の暗い力を放ち、稲妻の光を爆発させました。それは地面を破壊し、地面に、恐怖と破壊の力によって、黒い噴火口をつくりました。

しかし、マグワエンは、キャプタンの力強い表現に感動しませんでした。「あなたはふざけているわ。」と彼女は怒鳴りました。「あなたは私のイルカたちを殺したかもわからないわ。」

キャプタンは、女神からのそのような挑戦的な応答を予期していなくて、恥かしく思って少し彼の頭を垂れました。それで、彼らの上の黒い雲は薄い空気となって消えて行きました。しかし、キャプタンが、マグワエンに謝る機会を得る前に、彼女は深い呼吸をして、彼女の目を閉じ、細い腕を愛する海の方に差し出しました。キャプタンはそれに魅了されました。

マグワエンは彼女の口を広く開けて、かん高い叫びを發しました。それでキャプタンは耳を塞ぎました。すぐに海の上の空は怒りの雲で暗くなりました。すると海は上下して、破壊的な波を作り、それはすぐに高い空に届きました。これらの高い波が海の高さまで落ちてくると、地上は恐れのために震え上がりました。マグワエンはその高い波のひとつに指し示して、彼女の足元の地に向かわせ、それを破壊し、残忍な水でキャプタンを覆わせました。ただ、キャプタンの力と飛びあがる能力が、破壊的な波から彼を脱出させ、重く砕ける海に吞まれるのを救いました。

マグワエンは彼女の腕を下げて、暗い雲は、出てきた時と同じくらい素早く消えてゆきました。そして海はまた、静けさを取り戻しました。女神は自己満足の微笑を浮かべました。

ずぶ濡れのキャプタンは、マグワエンを見て、彼女の地からある表現に感銘を受けています。「すみませんでした。力ある女神様。」と彼は言いました。「あなたの力は、私と同様にすごい。」

マグワエンはキャプタンを見て微笑みました。今や、彼らは対等の立場に立ち、彼女は彼を恐れることなく、尊敬するようになりました。「深い海の生き物たちと以外、海の不思議なことを、誰とも語ることなく、また生活を分かち合うことなく、ひとりで生活するのは淋しいことです。」と彼女は言いました。「何世紀にもわたって、あなたのような方を捜していました。そして、あなたはあなたの力を立証してくださいました。今から先、私たちは自分たちの力を共に合わせて行くべきだと、私は信じます。」

キャプタンは、今や特別に美しく、力のあるマグワエンと恋に落ち、彼女を失いたくないと思いました。「私も同意します。これは神々の意志です。私たちは生活を共にするように運命付けられています。私は自分の風の力で陸を支配し、あなたはあなたの風の力で海を支配するのです。共に、私たちは統合して世界を支配します。私たちは命を生み出すこともできるし、命を破壊することもできます。私たちが破壊と不幸をもたらせるのと同様に、癒しと幸せを運ぶこともできるのです。あなたの海は私の雲に雨を作るために水を供給し、私のその風は、荒れ狂う海に静けさを与えられます。それは完全な共同作業です。

マグワエンはキャプタンのすぐれた言葉に微笑み、ふたつはすべての永遠のために存在していることを知りました。彼らは暖かく抱擁し合い、お互い口づけしました。

その火から、陸の風と海の風は調和をもって共に働き、地球の生命の維持を助けるために働いてきました。

時々、キャプタンが怒った時、激しい嵐、ハリケーン、台風を起こします。しかし、美しい女神マグワエンはすぐにキャプタンの気分を静めます。そして彼女は暖かで穏やかに元気づけるそよ風を陸と海に吹かせます。彼らは本当に完全な夫婦です。